

エゾシカ・ヒグマワーキンググループの経過報告・今後の予定

1. 令和3年度エゾシカ・ヒグマWGの開催概要

- ・第1回会議 令和3年7月1日（木）釧路市（ヒグマ関係）
7月2日（金）同 上（エゾシカ関係）
- ※WG開催に先立ち、7月1日（木）午前に植生指標検討部会も開催。

2. 主な議事内容

知床半島ヒグマ管理計画及び第3期知床半島エゾシカ管理計画の改定のため、各現行計画の総括及び次期計画策定に向けた議論を行いました。主な意見・指摘事項は以下のとおりです。

【ヒグマ関係】

■知床半島ヒグマ対策連絡会議からの報告について

- ・アクションプランに加えて管理計画の改定もこの連絡会議が担うこととなりましたが、会議運営の予算財源は限られており、道の財源（農水省の鳥獣被害防止特措法の鳥獣被害防止総合対策交付金）活用等も含めて会議運営体制を強化する必要がある、との意見がありました。

■知床半島ヒグマ管理計画の総括（案）について

- ・現行計画で定める8つの目標のうち、「①計画期間内におけるメスヒグマの人為的な死亡総数の目安を75頭以下とする」以外はほぼ未達成となることが報告されました。
- ・アクションプランに基づき、電気柵や「とれんべア」の設置、地域住民による草刈り活動等の対策が進んだことは評価された一方で、水産加工場等の加工残滓等への更なる対策検討が必要との意見がありました。
- ・環境研究総合推進費による調査研究の進捗状況が報告され、かなり精度の高いヒグマの個体数推定が可能になったことから、根拠を以て捕獲上限の設定ができることが評価されました。併せて、推進費終了後のモニタリング方法や実施体制の検討が必要との意見がありました。

■第2期ヒグマ管理計画の策定に向けた検討について

- ・目標設定は、現行計画と同様に、二層構造（5年間の計画期間で達成可能なものと、将来的に目指す中長期的なもの）で設定するのが良いとの意見がありました。
- ・目標③「利用者の問題行動に起因する危険事例」、④「地域住民や事業者の問題行動に起因する危険事例」、⑦「漁業活動（特に羅臼側の昆布番屋等）に係る危険事例」に関しては、主要対策とされている普及啓発は実施されているのに目標は未達成となりました。次期計画には目標達成のためのより効果的な対策を検討すべきとの意見がありました。
- ・目標⑤「市街地への出没件数」や目標⑥「農業被害」に関しては、斜里、羅臼、標津の3町それぞれでの目標設定を検討すべきとの意見がありました。

- ・次期計画では、現行計画の総括を踏まえた目標達成への課題の明確化と、限られた財源の中でどこを重点的に取り組むのか検討して対策を立てることが重要との意見がありました。

【エゾシカ関係】

■2020(令和2)シカ年度実行計画実施結果について

■2021(令和3)シカ年度実行計画案について

- ・昨年度行われた航空カウント調査において、知床岬地区の確認頭数が大幅に増加したことを受けて、知床岬での今後の自然植生への影響増大を抑えるべく、捕獲手法や捕獲時期の見直しを含め、あらゆる手法を組み合わせる必要がある、との意見がありました。

■第3期知床半島エゾシカ管理計画の総括ならびに第4期知床半島エゾシカ管理計画の策定に向けた検討について

- ・隣接地域は、北海道内において計画に基づく個体数調整に成功している唯一の地域であり、次期管理計画の策定方針として、隣接地域については、北海道が現在見直しを行っているエゾシカの捕獲推進プランと市町村の被害防止計画との連携・協調を推進していくため、資源利用と管理の考え方も含め、関係機関で調整していくような体制を整備する必要がある、との意見がありました。
- ・次期管理計画については素案を早めに出してもらい、WG前に十分議論可能なように準備すべき、との意見がありました。

【共通】

- ・会議の運営の仕方について、当日の会議時間が限られている中で十分な議論を尽くせるよう、リモート会議システムやメーリングリストを活用するなど、改善・見直しが必要との意見がありました。

3. 今後の令和3年度エゾシカ・ヒグマWGの開催予定

◆第2回WG 令和3年12月2～3日(木～金) 釧路市

○主な議題(予定)

<ヒグマ関係>

- ・知床半島ヒグマ管理計画の総括
- ・第2期知床半島ヒグマ管理計画(素案)

<エゾシカ関係>

- ・第3期知床半島エゾシカ管理計画の総括ならびに第4期知床半島エゾシカ管理計画の策定に向けた検討について

◆第3回WG 令和4年1月～2月頃 釧路市

以上

【環境研究総合推進費】

2019（令和元）年度から3カ年計画で、環境研究総合推進費「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発」によるヒグマの個体数推定等についての調査が行われています。

（実施主体：東京農工大、北海道立総合研究機構、北海道大学、知床財団）

- 1) 知床半島に生息するヒグマの個体数を推定するため、体毛を採取するためのヘアトラップを、2019年度は63カ所、2020年度は67ヶ所、半島各地に設置し、6～10月の期間中に2週間に一度の頻度で巡回し、採取を行いました。得られた試料を用いて、DNA 個体識別を行い、標識再捕獲法とタグ・リカバリー法を用いたモデル解析を進めています。
- 2) ヒグマの大量出没要因の解明のため、ヒグマの糞内容物と主要な食物資源量の関連を調べました。知床半島を6区画に区分し、2019年度は延べ855個の糞を、2020年度は延べ692個の糞を回収しました。またミズナラの豊凶調査、ハイマツの豊凶調査、カラフトマスの遡上調査を実施しました。
その糞内容物から、食性には半島内でも地域差がみられ、半島基部の地域では、初夏～晩夏に農作物（小麦やビートなど）に依存する傾向が認められました。各季節における利用割合の高かった食物は初夏では草本と昆虫、晩夏はサクラ属核果、サケ科魚類やハイマツ球果、秋にはミズナラ堅果でした。また、各食物資源の豊凶と、糞の内容物には一定の関連性が認められました。

